

# 医療通訳のブレンディッドラーニング —国内外の実施例より—

## Blended Learning for Medical Interpreters: Review of the Practices

大野 直子 ONO, Naoko

● 順天堂大学  
Juntendo University

 **Keywords** 医療通訳, ブレンド型教育, ブレンディッドラーニング  
medical interpreting, healthcare interpreting, blended learning, e-learning

### ABSTRACT

近年eラーニングと対面型授業を組み合わせたブレンディッドラーニングが注目されてきている。本稿では、医療通訳教育への導入の検討を目的として、国内外のブレンディッドラーニングを用いた授業実践研究の先行研究を調査し、実践例の対象、受講料、主催、教育内容について調査した。さらに先行研究の医療通訳の学習項目を抽出し、ブレンディッドラーニングの適切性を考察した。抽出された先行研究結果より、ブレンディッドラーニングは医療通訳に関しては日本における実践研究としてまとめたものは見当たらなかったが、国内外での実践例が存在した。今後、医療通訳教育に関して、導入したブレンディッドラーニングをより効果的に実践するためには、授業の構成と実践、評価を通じて継続的に検討を行う必要がある。

This paper provides an overview of the healthcare interpreting course design in blended learning and e-learning, by searching courses through a literature review and website search. We presents and discusses target audience, fee, host, contents of expected courses, as exemplified by the healthcare interpreting course offered under the Postgraduate Program in the Universities, and other private sectors. The survey results revealed that the typical healthcare interpreting course in Japan is relatively long, and lectures only were provided as e-learning. Contents of the program and evaluation should be continuously reviewed to provide effective blended learning programs. This paper offers practical suggestions for better blended learning program in healthcare interpreting of the future in Japan and comparisons with other courses the author has reviewed.

## 1. 序論

近年、日本における情報通信技術の発展により、大学等の高等教育機関では多様な形態の教育が行われるようになった。従来の講義型の授業の他にも、遠隔地からの授業のライブ配信、クリッカーを用いたリアルタイムでの双方向型授業など、情報通信技術を様々に用いた授業が展開されるようになった。大野（2013）は、18歳の大学生51名に対して、eラーニングやコンピューター使用への心理的な姿勢に関する質問紙を配布し5段階評価を求めた。eラーニングに効果を期待する（3.60）、eラーニングを行いたい（3.56）という質問項目が高得点を得て、コンピューターを使うのが苦手だ（2.90）という学生が少ないことから、大学生は比較的eラーニングに肯定的で、コンピューターを使うことへの抵抗感も低いことが示唆された。スマートフォンや他の電子機器を抵抗なく使用するこの世代には、マルチメディアを利用した教育の促進が提唱されている。青山学院大学では、社会情報学部の全学生にiPhoneを配布し、授業動画や教材（電子書籍やスライド配布資料）の配信、学生間の通話やメッセージ機能の利用を実施している。これにより、授業時間外のすきま時間や、コンピューターを利用できない環境でも自身で学習を進めることができるようになった。宮地ら（2009）によれば、eラーニングとは、「場所や時間を選ばず自由に学習できる環境を指しており、狭義には、ネットワークを利用して学習する環境を、広義にはICTを活用した学習方法全般を指している」。eラーニングの導入により、日本の高等教育は大きく発展した。教室に特定の時間に集合することによってのみ行うことが出来た講義は、遠隔地にいても、深夜であっても受講できるようになり、時間と距離の問題が解決可能になった。また講義形式で講師から一方通行で情報伝達が行われるのに対して、eラーニングでは受講者個人のペースで学習を進められるようになった。少子化ならびに国際的な競争及び厳しい国家財政の下で、高等教育・学術研究機関の経営の効率化も大きな課題となっている。録画教材を使用

することで、教員の稼働時間を抑えて経営を効率化することができるので、eラーニングの導入は、こうした経営効率化の流れにも対応しているといえる。しかしながら、日本においてeラーニングを含むICT教育はまだ進んでいるとはいえない。日本でICTを活用した教育の普及が立ち遅れている主な理由としては、日本で情報社会への適応が一部のPC操作に強い者のみによりなされているという、現在高等教育の教員である世代のICT教育に対する保守的かつ否定的な見方が根強いこと、教育プログラムを構成する専門家が不在であることなどが考えられる。ICT教育に対面授業による説明を加えることでこれらの欠点を埋めるものとして、近年eラーニングと対面型授業を組み合わせたブレンディッドラーニングが注目されてきている。藤代ら（2006）がWBTを用いた授業後に行ったアンケート結果によれば、ブレンディッドラーニングは「英語運用能力下位層のリスニング力向上、英語での発話意欲の高揚、コミュニケーションの捉え方の深化・双方向化」があり、知識面のみならずリスニングやコミュニケーションにも効果があることがわかっている。岩田ら（2013）は、図のように対面型授業とeラーニングの利点を挙げ、その双方の利点を兼ね備えるものがブレンディッドラーニングであるとした。図より、対面学習の利点は、講義、演習、実験、討論などを講師が一度に大勢の受講生に実施できること、対面によるコミュニケーションが可能であること、1つの場所に同じ時間に集合することから生まれる連帯感とラポール構築である。一方eラーニングでは、時間にほぼ無関係に迅速なフィードバックが行えること、受講生の都合に合わせて個々のペースで学習を進められること、またインターネット等を使用することで、教室外の学習機会が拡充されることなどがある。このようにブレンディッドラーニングは、対面学習とeラーニング双方の利点を兼ね備える学習方法であると考えられるが、まだ大学等の高等教育機関でブレンディッドラーニングが活用されている実態は十分に把握されていない。

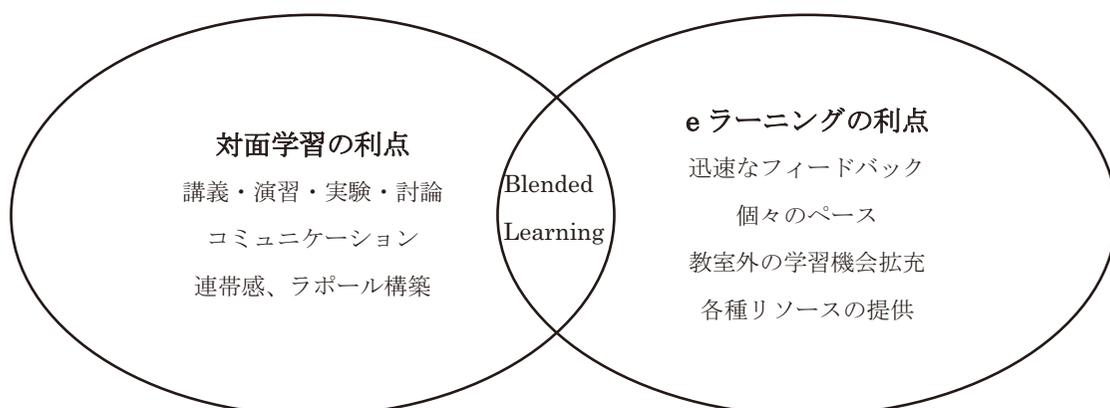


図 対面学習とeラーニング，ブレンディッドラーニング（岩田ら（2013）の論文の図より引用）

### 1.1 目的

本稿では，医療通訳教育への導入の検討を目的として，国内外のブレンディッドラーニングを用いた授業実践研究の先行研究を調査し，実践例の対象，受講料，主催，教育内容について調査する。さらに先行研究の医療通訳の学習項目を抽出し，ブレンディッドラーニングの適切性を検討する。

## 2. 方法

国内の先行研究調査には，CiNiiを用いて検索した。国外の先行研究検索にはPubMedを用いた。国内外の実践例検索には，「医療通訳/Medical Interpreting」「eラーニング」の検索ワードでWeb検索し，実際に行われている講座を抽出した。さらに実践例の対象，受講料，主催，期間，教育内容について調査し，先行研究の医療通訳の学習項目を抽出した。

## 3. 結果

### 3.1 医療通訳教育のブレンディッドラーニング：国内外の先行研究と実践例

先行研究を調査した結果，ブレンディッドラーニングの具体的な授業実践例として，安達（2007）の報告があった。（1）対面授業前のeラーニングで提供される資料の予習，（2）対面授業への出席，（3）授業後の小テスト受験を実践している。その

他にもブレンディッドラーニングでは，学習の目的に応じて対面授業とeラーニングを自由に組み合わせられていた。国内の医療通訳養成講座で，ブレンディッドラーニングを取り入れている団体は3件あり，そのうち2件は当日受講できなかった講義について別日に動画視聴による補講する形であった。対象は20歳以上で一定の語学力を有する者とした講座が多く，受講料は25～30万円で，期間は75～110時間と長期であった。また教育内容は，医療通訳の基礎知識と各診療科の基礎等で講義と演習を組み合わせしており，講義をeラーニングとしていた（表1）。

国外の医療通訳養成講座で，ブレンディッドラーニングを取り入れている高等教育機関は複数あったが，対象，受講料，主催，期間，教育内容についてある程度の情報を公開していた機関は2件で，いずれも大学であった（表2）。その他に完全オンライン学習の団体も7件あった。国外の医療通訳教育のブレンディッドラーニングに関しては，対象年齢と語学レベルは指定が無く，受講料は非公開で，期間は2年間であった。また教育内容は，York大学が医療通訳のみでなく会議通訳，法廷通訳も学ぶのに対しAMUでは医療通訳に特化して各診療科の基礎等で講義と演習を組み合わせていた（表2）。

国外の医療通訳養成講座で，完全オンライン学習の団体7件のうち4件を表3に示した。対象年齢と語学レベルは指定が無く，医療通訳の学習者

表1 医療通訳教育のブレンディッドラーニング：国内の実践例

講座タイトル	大阪大学 中之島センター 医療通訳コース	国際医療福祉大学 乃木坂スクール	国立国際医療研究センター 外国人患者受け入れ環境整備のための 医療通訳養成研修
対象	原則20歳以上で大学入学程度の語学力（CEFR B2）と高校卒業程度の知識がある者	原則20歳以上で大学入学程度の語学力（CEFR B2）と高校卒業程度の知識がある者	1) 医療通訳として活動をしている 2) 医療通訳の実地経験がない 3) 通訳従事予定 4) 外国人患者支援に関わる
受講料	I, II合計受講料182000円, 病院実習 60000円	250,000円	研修Ⅰ：50,000円 研修Ⅱ：100,000円 研修Ⅲ：50,000円 研修Ⅳ：100,000円
主催	大阪大学大学院医学系研究科 国際・未来医療学講座	国際医療福祉大学大学院 東京青山キャンパス乃木坂スクール事務局	国立国際医療研究センター 国際診療部 / 国際医療協力局
期間	医療通訳研修Ⅰ 全11日間 37.5時間, 医療通訳研修Ⅱ 全12日間 37.5時間	1日7時間の研修を15日間（約105時間）	研修Ⅰ（3日間, 20時間）, 研修Ⅱ（5日間, 40時間）研修Ⅲ（3日間, 20時間）, Ⅳ（30時間）
教育内容	研修Ⅰ：通訳の役割, 医療文化, 各器官の基礎知識 研修Ⅱ：通訳技術, トレーニング, コミュニケーション	通訳の役割, 倫理, 異文化理解, 各診療科と頻出する疾患の基礎知識（半日通訳演習, 半日講義）	研修Ⅰ：医療通訳の基礎・応用 研修Ⅱ：医療通訳と一緒に働く医療関係者, 医学・疾患・医療制度（e-learning研修） 研修Ⅲ：実技・演習 研修Ⅳ 臨地実習：スーパーバイズを受けながら外来及び病棟にて通訳

表2 医療通訳教育のブレンディッドラーニング：国外の実践例

講座タイトル	York University Glendon Campus (MCI) MASTER OF CONFERENCE INTERPRETING	Community Interpreting at Adam Mickiewicz University (AMU)
対象	学生と社会人	学生と社会人
受講料	非公開	非公開
主催	York University（カナダ）	AMU（ポーランド）
期間	2年間	非公開
教育内容	1年目はリアルタイムの完全オンライン学習で会議通訳, 医療通訳, 法廷通訳を学習, 2年目はグレンドンキャンパスで会議通訳の演習を行う。1年目を修了すると一般通訳のDiploma, 2年目を修了すると会議通訳の修士を付与される。アラビア語, 英語, フランス語, 中国語, ポルトガル語, ロシア語, スペイン語, トルコ語に対応している	Moodleを用いた, e-learningと対面授業を組み合わせたコース。病院という組織や医療制度について, 略語についての基本知識を学んだ後, 病歴聴取, 頻出する徴候, 身体検査, 血液検査, 外科治療, 処方箋と医薬品について学ぶ。受講後試験を行い評価する。

か、実際に活動している医療通訳者かで異なっていた。受講料は様々で、全体で800ドルという形式のほかにも、講義1件ごとに支払う形式や、月に14.95ドルなど月ごとに支払う形式の講座もあった。期間は全体では40時間であったが、数

時間のものを1件として好きだけ受講する形式のものもあった。また教育内容は、各種医療通訳の認定試験の要件である40時間の医療通訳基礎学習を実施するもの、試験対策講座、各トピックを選んで受講する形式のものがあった（表3）。

表3 医療通訳教育のオンライン学習：国外の実践例

講座タイトル	NCIHC ウェビナー	MEDICAL INTERPRETING TRAINING SCHOOL	The Health Care Interpreter Network (HCIN)	VOICE ACADEMY
対象	全ての医療通訳学習者	全ての医療通訳学習者	プロの医療通訳者	全ての医療通訳者
受講料	NCIHC会員は無料、非会員は1件20ドル～	800ドル	コースにより個別に設定。30日間アクセスし放題で20-35ドル	基本：無料、プロフェッショナル、月14.95ドル
主催	NCIHC	MITS	Health Care Interpreter Network	Voices For Health, Inc.
期間	動画は平均数時間	40時間	一件2～7時間	自由
教育内容	受講したいタイトルを選択して登録、動画とパワーポイント資料で受講する。ノートテイキング、遠隔通訳、用語集、発音、文化仲介、医療通訳者の院内感染対策など多岐に渡るタイトルで20種類以上ある。	インターネット環境と録音機器を用いた自宅学習プログラム。医療文書、ナレーション、医師患者間会話の通訳演習をする。医療通訳者の行動規範や、各診療科の通訳に関して1クラス1トピックになっており、各クラスの受講後には35～100問の小テストを受験できる。	緩和ケアでの医療通訳 抗凝固療法で働く医療通訳者の倫理 通訳者の検索技術 等様々なトピックの動画がある	基本プランでは、仲間の医療通訳者とのネットワークづくり、自主学習ビデオ、オンラインのフォーラム、医学用語自主学習教材が使用できる。Professionalは基本プランに、マイページで自己学習を管理できる画面がついたもの。

#### 4. 考察

国内外の医療通訳のブレンディッドラーニングについて、国内の医療通訳養成講座で、ブレンディッドラーニングを取り入れているものは受講料25～30万円と高く、期間も75～110時間と長期であった。これは、各講座が厚生労働省「平成25年度医療施設運営費等補助金 医療機関における外国人患者受入れ環境整備事業」の医療通訳育成カリキュラム基準（合計112.5時間）に基づき立案したことが原因であると思われる。また教育内容は、医療通訳の基礎知識と各診療科の基礎等で講義と演習を組み合わせており、講義をeラーニングとしていたが、休んだ際の補講という位置づけで、最初から講義をeラーニングのみとするところの方が少数であった。演習は対面で行われており、ロールプレイを自主練習するようなシステムは見られなかった。

国外の医療通訳養成講座で、ブレンディッドラーニングを取り入れており詳細情報を入手でき

た団体は2件で、いずれも大学であったが、その他に完全オンライン学習の団体もあった。国外の医療通訳教育のブレンディッドラーニングに関しては、対象年齢と語学レベルは指定が無く、受講料は非公開で、期間は2年間と長期であった。大学と大学院の中の講座であるため、学位取得のために2年間という定められた期間が必要であったと思われる。

国外の医療通訳養成講座で、完全オンライン学習の団体はブレンディッドラーニングよりも多く、対象年齢と語学レベルは指定が無く、医療通訳の学習者か、実際に活動している医療通訳者かで異なっていた。受講料は、全体で800ドルという形式のほかにも、講義1件ごとに支払う形式や、月に14.95ドルなど月ごとに支払う形式の講座もあり、これは日本の講座にはみられない形式であった。期間は全体では40時間であったが、これは各種医療通訳認定試験の要件を満たすための時間と考えられ、数時間のもを1件として好きなだけ受講する形式のものは、仕事をしながら受

講する者への配慮であると思われた。

これらの調査結果から、日本の医療通訳のブレンディッドラーニングへの提言は以下のとおりである。(1) トピック1件ごとに受講できる形式のものを立案する。(2) 医療通訳の試験対策の講座など目的別講座を立案する。(3) 講義のみならず演習においても、eラーニング教材の使用を検討する。(4) 講座の目的と受け方についての動画を、期間中いつでも参照可能にする。日本の医療通訳講座のように長期の講座では、受講者が講座の目的を途中で見失う恐れがあるので、受講中もいつも目的を意識できるようにするには(4)のような配慮が必要であると思われる。

本研究の限界は、主に英語で情報が公開されている医療通訳講座に限定して調査したことである。しかし、これまで医療通訳でブレンディッドラーニングを導入している講座に関して詳細に調査した研究はなかったため、本研究は意義があると考えられる。

## 5. 結論

本稿では、医療通訳教育への導入の検討を目的として、国内外のブレンディッドラーニングを用いた授業実践研究の先行研究を調査し、実践例の対象、受講料、主催、教育内容について調査した。どの項目を教育内容として取り上げるのか、どのようなコース構成にするのか、どれくらい対面にし、またeラーニングとするのか、またどのような教育内容が適切であるかに関しては、国の医療通訳の資格試験や要件により異なるが、主に米国の実施例から日本の医療通訳講座に取り入れられるものがあると考えられた。本研究では、調査から得られた情報を元に日本の医療通訳のブレンディッドラーニングに対する4項目の提言を行った。今後、医療通訳教育に関して、導入したブレンディッドラーニングをより効果的に実践するためには、授業の構成と実践、評価を通じて継続的に検討を行う必要がある。今後さらにブレンディッドラーニングの適切性が検討され発展することが望まれる。

## 参考文献

- 安達一寿 (2007). ブレンディッドラーニングでの学習活動の類型化に関する分析 日本教育工学会論文誌, 31, 29-40.
- 藤代昇文, 平松茂, 近藤勲 (2006). 英語のWBTリスニング教材の開発とそれを援用した指導法に関する一検討 日本教育工学会論文誌, 29 (Suppl.), 165-168.
- 岩田淳・玉木祐子・汪曙東・John Clayton (2013). 島根大学医学部におけるブレンディッドラーニングを導入した医学英語教育の実践 日本英語教育学会第42回年次研究集会論文集, 1-7.
- 宮地功・安達一寿 (2009). eラーニングからブレンディッドラーニングへ 共立出版.
- 文部科学省 マルチメディアを活用した21世紀の高等教育の在り方に関する懇談会 (1996). マルチメディアを活用した21世紀の高等教育の在り方について 報告書 1996年7月4日 <[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/001/toushin/960701.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/001/toushin/960701.htm)> (2016年11月18日)
- 文部科学省 (2011). 先導的・大学改革推進委託事業調査研究報告書 高等教育局大学振興課大学改革推進室, 26-27.
- 大野直子 (2013). 医療通訳における必要スキル: 文献考察と国内外プログラム概観 教育研究, 55, 317-326.
- Ono, N (2015). Development and Pilot Testing of a Blended Learning Program in English for Medical Purpose. Arab World English Journal Special Issue on CALL, 2, 22-37.